

「私をわかってくれる母」

廣江 紗楽

私は、母ととても仲が良い。でも、仲が良すぎるのは、はずかしいことなのだろうか。

そんなことを考えている時に、母が北村薫の「月の砂漠をさばさばと」という本をすすめてくれた。好奇心旺盛な女の子を見守る、小説家のお母さんとの仲良し親子の、楽しくほのほのとした日常会話が描かれた物語だ。母が結婚したころ、将来娘がほしいと思い、もし娘が生まれたら、この本のような親子関係をつくりたいと思っていたらしい。

私も小さいころから好奇心旺盛であり、何にでも興味を持って質問をしたり、おしゃべりや絵本が大好きだった。今でも、母とは一日の出来事を話したり、一緒に過ごす時間が多い。

けれど、最近の私は、いつも母と一緒にいることが、はずかしいことなのかと、疑問に思う時がある。それは、友達と比べて自立心が少ない気がしていたり、友達のさそいよりも、母との時間を優先してしまう時があるからだ。母と一緒にいるのは、何よりも安心するけれど、そのことを友達に知られるのははずかしい。そして、はずかしいと思っていることを、母に気付かれたくない。

そんな時、この本をすすめてきた母は、やはり私の心のモヤモヤに気付いていたのかもしれない。

い。母は、いつも私のちよつとした声の違いや、話し方で変化を感じ「何かあったの？」と聞いてくる。言葉にしくなくても、私のことを分かってくれる。いつも全力で応援してくれる母に、見守ってもらっていると感じた瞬間、胸がキュツとした。

時に叱ってくれたり、背中を押してくれたり、相談相手になってくれるそんな母は、何より私と仲が良いことをとてもうれしく思い、毎日の会話を楽しんでる。そして、すすめてくれた本は「親子の縦のつながりが、友達の横のつながりにより近づく」ということも教えてくれた。親といい関係を築けていたら、友達とのいい関係を築くことが得意になる。つまり、親子の縦のつながりは、生まれてから心と体の成長の基礎を作り、言葉やコミュニケーション能力を自然と学べるので、友達との横のつながりの関係性に役立つということだ。

私は、友達よりも心の成長がスローペースなのかもしれない。でも、今まで築いてきた母との関係は、これから築いていくたくさんの人との関係を良いものにしてくれると信じ、これからも安心して母と一緒に過ごす。

どんな時でも、笑顔でいる母と一緒にいると、私も笑顔になり、明るく元気でいられる。母と仲が良いことは、決してはずかしいことではない。今回のことで、母への感謝がより深まった。お母さん、ありがとう。

評価のポイント

揺れる自分の心理を客観視し、分析し、結論まで出している完成度の高い作品。